荘子の思想

（2024・8・6　異常猛暑やまず　ikemagu）

荘子（名は周）は紀元前三七〇年～三〇〇年頃（？）に生きた中国戦国時代の思想家で、孟子とほぼ同時代の人と考えられています。古い伝記として、司馬遷の『史記』（「老子韓非列傳第三」）に次の記述が見られます。

> 荘子者蒙人也。名周。周嘗為蒙漆園吏。與梁惠王、齊宣王同時。其学無所不闚。然其要本帰於老子之言。故其著書十余万言、大抵率寓言也。作漁父、盗跖、胠箧、以詆訿孔子之徒、以明老子之術。
>
> 荘子は蒙の人なり。名は周。周嘗て蒙の漆園吏たり。梁の恵王・斉の宣王と時を同じうす。其の学闚わざる所無し（あらゆる分野にわたっている）。然れども其の要は老子の言に本づき帰す。故に其の著書十余万言、大抵寓言を率くなり。漁夫、盗跖、胠箧を作り、以て孔子の徒を詆訿し、以て老子の術を明らかにす。

荘子（荘周）は戦国時代の宋国の蒙（現在の河南省商邱市県南郊）の生まれ。この辺りは漆の木が群生し、若き荘子は漆園の管理人をしていた。梁の恵王、斉の宣王の時代の人（注：これから孟子と同時代のB.C370～B.C300年頃の人ーギリシャのアリストテレスと同年代ーと考えられますが、孟子の中に荘子の名を一度も見かけず、荘子の中にも孟子の名が一度も出てきません。歴史の不思議ですね。）。彼は当時のあらゆる学派（儒家や法家、墨家など九流百家）の説に通じていたが、根本的な点では老子の説いたところに立脚し、著書は十余万字、概ねは架空の人のことば寓言を用いている。漁夫・盗跖・胠箧などの篇を作って、孔子の弟子を謗り、老子の思想を明らかにした。

荘子の思想は老子の思想基盤の上に立つものの、老子の思想がより現世的で生き方の問題や処世の知恵を説いているのに対し、荘子は一貫して超越的な生き方の問題、悟達の知恵を説き、思想としての厳しさと奔放さを備えているところにその特徴があると言われています。

さて、そのような荘子の思想はどのような歴史的環境下で生まれてきたのか。荘子の郷国である宋は古くから「四戦の地」と呼ばれるように戦禍の集中する土地でした。福永光司「古代中国の実存主義・荘子」からその状況を垣間見ておくと、『宋は魯・斉・衛・晋・楚など周囲の強国に侮られ踏みにじられた弱小国家で、弱者の悲哀と苦渋、侮蔑と屈辱と刑戮、戦乱と飢餓と流亡、この国の人民たちに与えられた苛酷な歴史的現実は、まさに人間の不自由の極限状況を示すものであった。荘子が生きたのは、このような歴史的現実の中であったのである。荘子の哲学はこのような精神の極限状況から出発する。』とあります。まさに戦国時代の想像を絶する凄まじい状況下に荘子はその一生を送ったことになります。

荘子の書は、西暦四世紀、西晋の学者・郭象が整理したとされ、内篇七、外篇十五、雑篇十一の合計三十三篇、約六万五千字からなっています。そのうち、内篇だけは内容を示す題目が付いていて、

荘子の思想体系はこの内篇に尽くされているとされます。外篇、雑篇は、内篇の思想内容を解釈し、荘子の門人たちが書き加えたものと言われています。

さて、内篇の題目とその概要は次の通りです。

一番目「逍遥遊」ー囚われのない自由なのびのびした境地に心を遊ばせること
二番目「斉物論」ー彼此・是非び差別観を超えて万物斉一の理を明らかにする
三番目「養生主」ー生命を養い真の生き方を遂げるための要諦
四番目「人間世」ー人々の交わる世の中、具体的な処世の問題を主として述べる
五番目「徳充府」ー重要なのは人間の中身で、外見などは問題ではないと説く
六番目「大宗師」ーすべての存在の根源の道
七番目「応帝王」ー帝王としてふさわしい自然のままの在り方を貴ぶ。

それでは、例によって漢文名作選1に準拠し、（自分なりの解釈を通して）荘子の思想を見ていきます。

■ 内篇

＝逍遥遊篇＝

「逍遥」とは気ままにあちこちを歩き回ること、「游」は楽しみにふけること。とすると、「逍遥遊」とは何ものにも囚われのない自由な伸び伸びした境地に心を遊ばせるといった意味でしょうか。逍遥遊篇は、いかなるものにも束縛されない絶対者の囚われのない生活、自由の境地が奇想天外なたとえ話で語られています（福永光司）。

●北冥に魚有り（鵬鯤の物語）

北冥有魚。其名為鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而為鳥。其名為鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運則将徙於南冥。南冥者、天池也。斉諧者、志怪者也。諧之言曰、「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、摶扶搖而上者九万里、去以六月息者也。」

北冥に魚有り。其の名を鯤と為す。鯤の大いさ其の幾千里なるを知らず。化して鳥と為る。其の名を鵬と為す。鵬の背、其の幾千里なるを知らず。怒んで飛ぶや、其の翼垂天の雲のごとし。是の鳥や、海運けば則ち将に南冥に徙らんとす。南冥とは天池なり。斉諧なる者は、怪を志せる者なり。諧の言に曰わく、「鵬の南冥に徙るや、水に撃つこと三千里、扶揺に摶ちて上る者九万里、去りて六月を以て息ふ者なり。」と。

※逍遥遊の世界は、まず、「鵬鯤」の物語から始まります。「鯤」とは小魚（または魚卵）を意味しますが、実はそれが途方もない大魚で、大魚が鵬に変化する。この鵬が飛び立つとその翼は天空一面を覆う雲のようだというのですから、その常識の埒外さと壮大なスケールには初っ端から度肝を抜かれます。空間・時間に束縛された我々の常識の世界を飛び超えて無限の時間と空間に誘おうとしているのでしょうか。尚、『海運けば』というのは、福永光司は「東シナ海の季節風に伴う海潮の奔騰を海が動くと考えたのであろう」と指摘しています。

世界の北の果て、波も暗く遥かなる北の海に魚がいる。その名を鯤という。鯤の大きさは何千里あるのか分からない。その鯤がどういうことか一朝たちまち化けて鳥になった。その名を鵬という。鵬の背丈は何千里あるのか分からない。鵬が勢いづけて飛び立つと、その翼は空高く遠くにある青空を覆う雲のようである。この鳥は、（季節風により）海面が波立つときには南の海に移ろうとする。南の果ての海は、天の造った池である。（ところで。私の話はまんざらでたらめではないぞ。というのは）斉諧とは怪異・不思議な話を記した本であるが、その斉諧にこうある、「鵬が南の果ての海に移るときには、水面を羽ばたくこと三千里、羽ばたいてつむじ風を起こして上昇すること九万里、六月（海運くとき）の風に乗ってゆったりと飛び続け、そして休息する。」と。

●野馬や、塵埃や（地球は青かった）

野馬也、塵埃也、生物之以息相吹也。天之蒼蒼、其正色邪。其遠而無所至極邪。其視下也、亦若是則已矣。且夫水之積也不厚、則負大舟也無力。覆杯水於坳堂之上、則芥為之舟、置杯焉則膠。水淺而舟大也。風之積也不厚、則其負大翼也無力。故九万里則風斯在下矣。而後乃今培風、背負青天、而莫之夭閼者、而後乃将図南。

野馬や、塵埃や、生物の息を以て相吹けるものなり。天の蒼蒼たるは、其れ正色か。其れ遠くして至り極まる所無きか。其の下を視るや、亦た是くのごとくならんのみ。且つ夫れ水の積むや厚からざれば、則ち大舟を負ふや力無し。杯水を坳堂の上に覆せば、則ち芥之が舟と為るも、杯を置けば則ち膠す、水浅くして舟大なればなり。風の積むや厚からざれば、則ち其の大翼を負うや力無し。故に九万里にして則ち風斯に下に在り。而る後に乃今風に培り、背に青天を負ひて、之を夭閼する者莫し。而る後に乃今将に南するを図らんとす。

※地上では万物の命の営みにより陽炎が立ち昇り、塵が舞い上がっているが、天空高く飛ぶ鵬から生きとし生きるものが犇めき合っている地上を眺めれば、それは透明な sky blue のように蒼々として見えているだろう。地上の矮小さと雑多とを超克するもの、それは鵬の限りなき飛揚にあるのだと言っているようです。

野馬（陽炎）や塵埃は、なにがしか大きな者（造物主）が息（呼吸）によって立ち昇らせているものである。それなら、空が果てしなく青々として見えるのは、それが天空の本当の色なのか。それとも、天と地との限りなき隔たりがそれを青く見せているのか。（恐らく無限の距離がそれを青く見せているのであろう）。そうすると、鵬が九万里の高みより見下ろすときには、同じように青青と広がる世界が見えるに違いない。そもそも、底の浅い水たまりでは、大きな船を浮かべることはできない。杯の水をでこぼこした床（坳堂）の上にあけると、ごみは舟となって浮かぶが、そこに杯を置くと底がぴったりついてしまう。たまり水は浅いのに舟が大きいからである。同じく、風が十分な強さでなければ、鵬の大きな翼を負い支えるのに力が足りない。そこで鵬は、九万里昇ることで、翼を支える風がその下に存在することになるのだ（九万里の上空にはその大風が吹き集っている）。鵬はこの大風の背にその翼をのせて、果てしなく拡がる青空の下、何ものにも妨げられることなく、一路南の海を目指して飛翔してゆくのである。

● 蜩と鷽鳩と之を笑ひて曰く（鷽鳩、大鳳を笑う）

蜩与鷽鳩笑之曰、「我決起而飛、搶榆枋、時則不至而控於地而已矣。奚以之九万里而南為。」適莽蒼者、三飡而反、腹猶果然。適百里者、宿舂糧。適千里者、三月聚糧之二虫、又何知。小知不及大知、小年不及大年。奚以知其然也。朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。此小年也。楚之南有冥霊者。以五百歲為春、五百歲為秋上古有大椿者。以八千歲為春、八千歲為秋。而彭祖乃今以久特聞、衆人匹之。不亦悲乎。

蜩と鷽鳩と之を笑ひて曰はく、「我決起して飛び、榆枋に搶くに、時に則ち至らずして地に控つるのみ。奚を以て九万里に之きて南するか。」と。莽蒼に適く者は、三飡して反るも、腹は猶ほ果然たり。百里を適く者は、宿べに糧を舂く。千里を適く者は、三月糧を聚む。之の二虫、又何をか知らんや。小知は大知に及ばず、小年は大年に及ばず。奚を以て其の然るを知るや。朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず、此れ小年なり。楚の南に冥霊なる者有り。五百歲を以て春と為し、五百歲を秋と為す。上古に大椿なる者有り。八千歲を以て春と為し、八千歲を秋と為す。而るに彭祖は乃今久しきを以て特り聞こえ、衆人之に匹せんとす。亦悲しからずや。

※「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」という有名な言葉があります。小知は大知に及ばずで、荘子は、蜩や小鳩とはならず、（何ものにも囚われない絶対的自由の境地に立つ）鵬のような壮大な宇宙的スケールで只今の命に向きあっていこうと鼓舞しているように見受けられます。

蜩と小鳩が、鵬をあざ笑ってこう言う、「我々は奮い立って飛び上がり、楡（ニレ科の落葉高木）や枋（ニシキギ科の落葉低木）の木に突っ込んでいくけど、時には枝まで行きつけないで地面に叩きつけられて終わってしまう。どうして九万里も昇ってから南に飛んで行くのか（そんな馬鹿げたことができようはずもない）。」と。郊外の野原（莽蒼）に出かける人は、三食の弁当（三飡）をもって出かけて帰って来ても、腹はまだ満たされている。百里の長旅に出る人は、前の晩から米を搗いてを食料を準備・支度する。千里の長旅に出る人は、三ケ月もかけて食糧を集め準備する。この小さな蜩や小鳩には、鵬が図南の翼を広げるために九万里の高みに昇ることを理解できるはずがない。知恵小さきものは、大いなる知恵を持つものには及ばない。短き年寿（寿命）をもつものは、長き年寿を持つものに到底匹敵しないのである。どうしてそのことが分かるか。朝に生えて夕に枯れ死すキノコ（朝菌）には、一ヶ月（晦朔）という長さは分からない。一夏の命である夏蝉（蟪蛄）には一年という長さ（春秋）は分からない。これらは短い寿命である。楚の国の南に冥霊という亀（溟海にいるという長寿の亀）がいて、五百年を春とし、五百年を秋としている。大昔には大椿という木があって、八千年を生長する春とし、八千年を落葉する秋としていた。ところが（八百年生きた）彭祖は現在、長寿者として特に有名であり、世の人々は彼と同じくらい長寿を得たいと狂奔している。（たかが八百歳。冥霊や大椿に比べたら儚いものだ）なんと（みじめでちっぽけで）悲しいことではないか。

●吾に大樹有り（無用の用）

惠子、謂荘子曰、「吾有大樹。人謂之樗。其大本擁腫而不中繩墨。其小枝卷曲而不中規矩。立之塗、匠者不顧。今、子之言、大而無用。衆所同去也。」荘子曰、「子独不見狸乎。卑身而伏、以候敖者。東西跳梁、不辟高下。中於機辟、死於罔罟。今夫斄牛、其大若垂天雲。此能為大矣、而不能執鼠。今、子有大樹、患其無用。何不樹之於無何有之鄉、広莫之野、彷徨乎無為其側、逍遙乎寢臥其下。不夭斤斧、物無害者。無所可用、安所困苦哉。」

恵子、荘子に謂ひて曰はく、「吾に大樹有り。人之を樗と謂ふ。其の大本は擁腫して縄墨に中たらず。其の小枝は卷曲して規矩に中たらず。之を塗に立つれば、匠者も顧みず。今、子の言、大にして無用なり。衆の同に去る所なり。」と。荘子曰はく、「子独り狸牲を見ずや。身を卑くして伏し、以て敖ぶ者を候ふ。東西に跳梁し、高下を避けず。機辟に中たりて罔罟に死す。今、夫の斄牛は、其の大いさ垂天の雲のごとし。此れ能く大なりと為すも、而も鼠を執らふること能はず。今、子大樹有りて、其の用無きを患ふ。何ぞ之を無何有の郷、広漠の野に樹ゑ、彷徨として其の側に為す無く、逍遥として其の下に寝臥せざる。斤斧に夭せられず、物に害する者無し。用ゐるべき所無きも、安くんぞ困苦する所あらんや」と。

※恵子（恵施）ー中国戦国時代の政治家・思想家ーは荘子の友人で「荘子」の中に屢々登場します。恵子は荘子に向かって、君の思想はあまりにも超世俗的で現実に何ら役に立たないぞといったことを、大樹の樗木のように何の役にも立たず誰にも相手にされない無用の存在だと婉曲的な言い回しで皮肉を放ちます。荘子はそれに対し、君こそ（政治家として）ちょこちょこと動き回っては罠や網に引っ掛かり命を落とす狸や鼬のようなものじゃないかと、これまた婉曲的に逆襲します。ところで超俗的立場から万物を見れば、「無用」というものは一切無く、真に有用なるものは世俗の有用さを超えるものだという「無用の用」を説きます。だから、無用と言って一体何を悩むことがあろうかと恵子に諭します。

恵子が荘子に言った、「私のところに大木がある。人々はこれを樗と呼んでいる。樗の幹は瘤だらけ（擁腫）で墨縄で直線も引けない。その小枝は曲がりくねっていて、コンパス（規）や指金（矩）も当てられない。これを道に立てておいても、匠者（大工、木工職人）は振り返りもしない。ところで今、あなたの話も大きすぎて用いようがないから、人々みんなにそっぽを向かれるのだ。」と。荘子は言った、「あなた、あの狸や鼬を知っているだろう。身を低くして伏せ、ふらふらと出てくる獲物に狙いをつける。と思うと、右に左の飛び跳ね、高い所も低い所へもおかまいなしにゆく。が、結局は（その器用さが災いして）仕掛けの罠（機辟）にかかり、捕網（罔罟）にかかって命を落としてしまう。ところがあの犛牛（田畑を耕す牛）は、その大きいこと空一面に広がった雲のようだ。これこそ大きいということができるのだが、そのくせ鼠一匹捕まえることもできない（物はさまざまなので用い方もそれに従うべきだ）。今、あなたのところに大木があって、使い道がなのを気に病んでいる。どうして、何ものも存在しない土地（無何有の郷）や広々とした野原に植え、のんびりとその側で何もせず、ゆったりとその下で寝そべったりしないのか。（不用の樗は）斤や斧で若くして切られることもなく、何物にも傷つけられることもない。使い道がないといって、何の悩むことがあろうか。」と。

＝斉物論篇＝

●荘周夢に胡蝶と為る（胡蝶の夢）

昔者、荘周夢為胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喩適志与。不知周也。俄而覚、則蘧蘧然周也。不知、周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。周与胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。（内篇・養生主）

昔者、荘周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩しみて志に適へるかな。周たるを知らざるなり。俄かにして覚むれば、則ち蘧々然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるかを。周と胡蝶とは、則ち必ず分有らん。此を之物化と謂う。

※荘子といえば「荘周夢に胡蝶と為る」という一節を思い浮かべる方も多いと思います（かくいう私もそうです）。さて、夢の世界と現実の世界とは本当に区別があるのか。区別して考えるからこそ現実の世界で様々悩み、苦しみを味わうことになるのではないか。自他の区別のない、自他が融合した万物一体の世界（万物斉同）を体覚（大いなる目覚め）すれば、夢と現実という相対性から解き放たれ、苦悩も煩悩もなく人生を過ごせるのではないかと説いています。即今只今ということでしょうか。道歌に『今今と今という間に今ぞ無く、今という間に今ぞ過ぎゆく』というのがあります。

あるとき、荘周は夢の中で蝶になった。ひらひらと楽しんで（栩栩然として）、まさに蝶そのものであった。何とも言えず楽しい気持ちになって、胡蝶の自由を心ゆくばかりひらひらと舞っていた。自分が夢に胡蝶となっていることも忘れて。しばらくして目が覚めて我にかえる（蘧々然として）と自分は荘周ではないか。一体、荘周が夢を見てその中で蝶になったのか、それとも蝶が夢を見てその中で（人間の）荘周になっているのか。しかし、荘周と蝶とは必ず区別があるはずだ。しかし、実際には区別などないのである。実在の世界では、夢もまた現実であり、現実の世界もまた夢であろう。一切存在が常識的なしがらみを突き抜けて。自由自在に変化しあう世界、いわゆる「物化（万物の極まりない流転）」の世界こそ実在の真相なのだ。人間は与えられた現在を与えられた現在として、楽しく逍遥すればよいのだ。

＝応帝王篇＝

●南海の帝を儵と為し（渾沌物語）

南海之帝為儵、北海之帝為忽、中央之帝為渾沌。儵与忽時相与遇於渾沌之地。渾沌待之甚善。儵与忽謀報渾沌之徳曰、「人皆有七竅、以視聴食息。此独無有。嘗試鑿之。」日鑿一竅、七日而渾沌死。

南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と時に相与に渾沌の地に遇ふ。渾沌之を待つこと甚だ善し。儵と忽と渾沌の徳に報いんことを謀りて曰はく、「人皆七竅有り、以て視聴食息す。此れ独り有ること無し。嘗試みに之を鑿たん。」と。日に一竅を鑿つに、七日にして渾沌死せり。

※荘子の言う「渾沌」とは老子の「道の道とすべきは常の道に非ず」の「道」のことでしょうか（既稿「老子の思想」参照）。南海と北海は相対世界な人知・人為の世界と捉えられます。渾沌が棲むという人知・人為の加わらない未分化の地にたまたま南海の帝と北海の帝が出会った。帝達はその地であまりにも心豊かな時を過ごすことができたので、その返礼として渾沌に人間が持つ目・鼻・口・耳の穴を付けてやれば、見たり聞いたり、食べたり息をしたりできるので、渾沌もきっと大喜びするだろうと人知（分別知）を働かせます。そこで渾沌に毎日一

つづつ穴を空けていき、七日目に全部の穴を空けたところ、果たして渾沌は頓死した。混沌は混沌のままで自在に用いていたのです。人知の浅はかさというものでしょうか。

南海にいる帝を儵といい、北海にいる帝を忽といい、中央にいる帝を渾沌という。儵と忽とが、ある時共に渾沌の土地で出会った。渾沌は二人を心から歓待した。そこで儵と忽が、渾沌の恩義に報いようと相談した。「人はだれでも七つの穴（目2、鼻2、耳2、口1）を持ち、それで見たり聞いたり、食べたり息をしたりしている。ところが渾沌だけはそれがない。ひとつ穴を開けて渾沌を喜ばしてやろう。」と。そこで一日に一つの穴を開けていったところ、七日たったら渾沌は死んでしまった。

■外篇

＝秋水篇＝

●恵子梁に相たり（鴟得腐鼠）

惠子相梁。莊子往見之。或謂惠子曰、「莊子来、欲代子相。」於是、惠子恐搜於国中三日三夜。莊子往見之曰、「南方有鳥。其名鵷鶵。子、知之乎。夫鵷鶵発於南海、而飛於北海。非梧桐不止、非練実不食、醴泉不飲。於是、鴟得腐鼠。鵷鶵過之。仰而視之曰、「嚇。」今、子欲以子之梁国而嚇我邪。」

恵子梁に相たり。莊子往きて之に見えんとす。或ひと恵子に謂ひて曰く、莊子来り、子に代りて相たらんと欲す。」と。是に於いて、恵子恐れて国中を捜すこと三日三夜なり。莊子往きて之に見えて曰く、南方に鳥有り、其の名は鵷鶵。子、之を知るか。夫れ鵷鶵は南海を発して、北海に飛ぶ。梧桐に非ざれば止まらず、練実に非ざれば食らはず、醴泉に非ざれば飲まず。是に於いて鴟、腐鼠を得たり。鵷鶵之を過ぐ。仰ぎて之を視て曰く、『嚇』と。今、子子の梁国を以て我を嚇せんと欲するか。」と。

※地位や名誉は大切なものだが、それはあくまで俗世間の価値観だ。それに縛られるのは如何なものかと、莊子は友人恵子に巧みな比喩で説いています。

恵子（恵施）が梁の国の宰相をしていた時、莊子は出向いて恵子に会いに出かけて行った。するとある人が恵施に向かってこう言った、「莊子がやって来て、貴殿に代わって宰相になろうとしていますよ。」と。これを聞いて恵子は恐れをなして莊子を梁の国中に探し回らせること三日三晩。（そのことを聞いた）莊子は恵子をたずねてゆくと、こう言った。「南方に一羽の鳥がいる。その名を鵷鶵（鳳凰の一種）という。貴公ご存じか。そもそもこの鵷鶵は、南の海を飛び立って北の海に飛んでゆくが、その途中、青桐（梧桐：樹高 10～20m 程になるアオイ科アオギリ属の落葉高木）の木以外は止まらず、竹の実

（練実：滅多に実を結ばない）以外は食べず、甘泉の水以外は飲まないという霊鳥である。ところがあるとき、一羽の鳶（鴟）が腐った鼠を捕まえたところに鵷鶵が飛んできた。鼠を盗られることを恐れた鳶は、鵷鶵をふり仰いでぐっと睨みつけ『こらっ、しっ！』（嚇）と鳴いて脅したというのだ。ところで今、君は梁国の宰相の地位をこの私に奪われはしまいかと心配して、この私に嚇と叫ぶつもりでもいるのだろうか。あの腐れ鼠にしがみついている、さもしい鳶のように。」

●荘子恵子と濠梁の上に遊ぶ（濠梁の間の想い・知魚楽）

「荘子、与恵子遊於濠梁之上。荘子曰、「儵魚出游従容。是魚楽也。」恵子曰、「子非魚、安知魚之楽。」荘子曰、「子非我。安知我不知魚之楽」。恵子曰、「我非子。固不知子矣。子固非魚也。子之不知魚之楽全矣。」荘子曰、「請循其本。子曰、『女安知魚楽』云者、既已知吾知之而問我。我知之濠上也。」

荘子、恵子と濠梁の上に遊ぶ。荘子曰く、「鯛魚出でて遊び従容たり。是れ魚の楽しむなり」と。恵子曰く、「子は魚に非ず。安くんぞ我の魚の楽しむを知らざるを知らんや。」と。荘子曰く、「子は我に非らず。安くんぞ我の魚の楽しむを知らざるを知らんや。」と。恵子曰く、「我は子に非らず。固より子を知らず。子は固より魚に非らざるなり。子の魚の楽しむを知らざるは全し。」と。荘子曰く、「請ふ其の本に循はん。子曰く、『女安くんぞ魚の楽しむを知らんや。』と云ふ者は、既已に吾の之を知るを知りて我に問ふ。我之を濠の上に知るなり。」と。

※荘子と恵子が散歩途上の橋の上から遊泳している小魚を眺めて何やら分かったような分からないような会話をしています。私は君ではないから君の心の内が分かるはずがない。同様に君は魚ではないから君にいま遊泳している魚の気持ちが分かるはずはないだろう、と恵子は荘子に詰め寄ります。論理的に筋が通っていますね。これに対して荘子は「知る」ということは分別だ。分別を超えた世界では私も魚の自他不二にあるからだと説いていると思います。

荘子が恵子と一緒に掘割の橋梁のあたりを散歩していた。荘子が言った「儵（川魚）が顔を出してのんびりと泳いでいる。魚も楽しんでいるんだな。」と。すると恵子は言う、「君は魚ではないだろう。どうして魚が楽しんでいると分かるんだい。」と。荘子は言う、「君は私じゃない。どうして私が魚が楽しんでいるのが分からない、ということが分かるんだ。」と。恵子は言った。「私は君でない。当然君のことは分からない。君も当然魚ではない。君が魚の楽しみがわからない、ということと全く同じだよ。」荘子は答えた、「話を本筋に戻ってみようじゃないか。君が私に『君にどうして魚の楽しみがわかるのか』と言ったということは、すでに君は私に魚の楽しむのが分かるということが分かって、

私にそう聞いてきたんじゃないか。それと同じように、私は橋の上にいて、魚の楽しんでいるのが分かったのだ。」

＝至楽篇＝

●荘子の妻死す（鼓盆而歌）

荘子妻死。惠子弔之。荘子則方箕踞鼓盆而歌。惠子、「与人居、長子老身。死不哭亦足矣。又鼓盆而歌、不亦甚乎。」荘子曰、「不然。是其始死也、我独何能無概然。察其始而本無生。非徒無生也、而本無形。非徒無形也、而本無気。雑乎芒芴之間、変而有気。気変而有形、形変而有生。今又変而之死。是相与為春秋冬夏四時行也。人且偃然寝於巨室。而我噭噭然、隨而哭之、自以為不通乎命。故止也。」

荘子の妻死す。惠子之を弔ふ。荘子則ち方に箕踞し、盆を鼓して歌う。惠子曰く、人と与に居りて、子を長じ、身を老す。死して哭せざるは、亦た足れり。又盆を鼓して歌ふは、亦た甚だしからずや。」と。荘子曰く、「然らず。是れ其の始め死するや、我独り何ぞ能く槩然たること無からんや。其の始めを察するに、本生無し。徒だに生無きのみに非ずして、本形無し。徒だに形無きのみに非ずして、本気無し。芒芴の間に雑はり、変じて気有り。気変じて形有り、形変じて生有り。今又変じて死に之く。是れ相与に春秋冬夏四時の行を為せるなり。人且つ偃然として巨室に寝ぬ。而して我噭噭然として、随ひて之を哭せば、自ら以て命に通ぜずと為す。故に止むるなり。」と。

※人間の生死は天地自然の巡り合わせ（春夏秋冬・四季の変化）と同じものであるから、「死」は即「生」、「生」は即「死」と死生一如の境地を荘子は体を張って表現していると思います。最愛の妻を亡くせば誰でも嘆き悲しむのは至極当たり前のこと。「妻の死に盆を叩いて歌っている」とは、とうとうあの荘子も気が触れたかと思われますが、歌いながら心で泣き、歌と己を同化して妻の命の永遠性を讃嘆しているのではないか。歌は最愛の妻への葬送曲ではないでしょうか。

荘子の妻が亡くなった。惠子が弔問に行った。ところが荘子は両足を投げ出して座り（箕踞し）、盆（素焼きの器）を叩きながら歌っていた。惠子は言う、「奥さんと一緒に生活し、子供を育てあげ、（苦楽を共にして）年老いてきた仲ではないか。奥さんが死んだのだから、泣き叫ぶ（哭）ことはせぬというだけならまだしも、盆を叩いて歌っているとは何事だ。」と。荘子は答えた、「いやそうじゃない。女房が死んだ当初は、私だってどうして嘆き悲し（槩然）まずにおられたか。しかしよく考えてみる

と、人間はその初めは、もと生きているということはなかった筈だ。生きていることがなかっただけではない、もともとは形（肉体）もなかったのだ。もともとは形がなかっただけではなく、もともとは気というものもなかったはずだ。それが、混沌として捉えどころのない状態（茫忽）から、やがて変化して「気」が生まれ、「気」が変化して「形」が生じ、「形」が変化して「生」が生じ、そして今また変化して「死」へと帰ってゆくのだ（渾沌←気←形←生←死（渾沌））。これは春夏秋冬の四季の巡りが順繰りに行われているようなものだ。女房は安らかに（偃然）天地という広々とした部屋（天地渾沌の世界）に身を横たえて眠りにつこうとしている。それなのに私が大声をあげて（嗷嗷然）妻に取りすがり、妻の死を嘆き叫んだりしたりしたら、私は天命というものを腹の底から理解していないことになる。だから、取りすがって泣くのを止めたのだ。」

＝駢拇篇＝

●夫れ小惑は方を替え（以身殉利）

夫小惑易方、大惑易性。何以知其然邪。自虞氏招仁義、以撓天下也、天下莫不奔命於仁義。是非以仁義易其性与。故嘗試論之。自三代以下者、天下莫不以物易其性矣。小人則以身殉利、士則以身殉名、大夫則以身殉家、聖人則以身殉天下。故此数子者、事業不同、名声異号、其於傷性以身為殉一也。

夫れ小惑は方を易へ、大惑は性を易ふ。何を以て其の然るを知るや。虞氏の仁義を招げて、以て天下を撓ししより、天下は仁義に奔命せざるは莫し。是れ仁義を以て其の性を易ふるに非ざるか。故に嘗試みに之を論ぜん。三代より以下は、天下は物を以て其の性を易へざるは莫し。小人は則ち身を以て利に殉じ、士は則ち身を以て名に殉じ、大夫は則ち身を以て家に殉じ、聖人は則ち身を以て天下に殉ず。故に此の数子なる者は、事業同じからず、名声号を異にするも、其の性を傷り身を以て殉を為すに於いては一なり。

※儒家の仁義の教えは、いたずらに世の中を惑わせ人間の本性を損なう根本原因だと手厳しく批判しています。尊い教えも無批判に鵜呑みすると、それに縛られてしまって人間の本来性が封じ込められ、その結果、囚われのない自由な人生を送ることができなくなると説いています。）

そもそも小さな惑いであれば人としての進むべき方向を取り違えるくらいで済むが、大きな惑いとなると人としての本性をまで取り換えてしまうものだ。どうしてそうなることが分かるか、その分けは（儒家の聖人と崇められた）帝舜（有虞氏）が仁義の道を標榜して世の中を惑乱してからというもの、世をあげて仁義を目指し奔走しないものはないという有様になった。これこそ、仁義という外的規範

によって人間の自然の本性を取り換えるものだ（これこそ大いなる惑いではないか）。では、このことをもう少し説明してみよう。夏・殷・周の三代の王朝よりこのかた、世の人々はみな自己の外にある物（利益や名誉など）を追い求めて自然の本性を見失っている。一般庶民は一身うぃ利益のために犠牲にし、士（下級官吏）は一身を名声のために犠牲にし、大夫（高級官僚）は一身を家（領地）のために犠牲にし、聖人（＝帝王）は一身を天下のために犠牲にしている。これらの身分の違う人々は、やることはそれぞれ違い、それによって得る名声もさまざまであるが、人間としての本性を傷つけ、一身を外物の犠牲にしている点ではみな同じである（悲しむべき自己喪失ではないか）。

●臧と穀と、二人相与に羊を牧して、俱に羊を亡ふ（読書亡羊）

臧与穀、二人相与牧羊、而俱亡其羊。問臧奚事、則挾策読書。問穀奚事、則博塞以遊。二人者、事業不同、其於亡羊均也。伯夷死名於首陽之下、盗跖死利於東陵之上。二人者、所死不同、其於残生傷性均也。奚必伯夷之是、而盗跖之非乎。天下尽殉也。彼其所殉仁義也、則俗謂之君子。其所殉貨財也、則俗謂之小人。其殉一也、則有君子焉、有小人焉。若其残生損性、則盗跖亦伯夷已。又悪取君子小人於其間哉。

臧と穀と、二人相与に羊を牧して、俱に羊を亡ふ。臧に奚をか事とせしやと問えば、則ち策を挾みて書を読めりと。穀に奚をか事とせると問えば、則ち博塞して以て遊べりと。二人なる者は、事業同じからざるも、其の羊を亡ふに於いては均しきなり。伯夷は名に首陽の下に死し、盗跖は利に東陵の上に死す。二人なる者は、死する所同じからざるも、其の生を残い性を傷るに於いては均しきなり。奚ぞ必ずしも伯夷の是にして盗跖の非ならんや。天下は尽く殉なり。彼其の殉ずる所仁義なれば、則ち俗之を君子と謂ふ。其の殉ずる所、貨財なれば、則ち俗之を小人と謂う。其の殉は一なるに、則ち君子有り、小人有り、其の生を残ひ性を損ふがごときは、則ち盗跖も亦た伯夷なるのみ。又悪くんぞ君子小人を其の間に取らんや。

※「殉じる」というのは、犠牲を払って忠義や信念を貫き通すことです。傍から見ていれば大変格好いいのですが、忠義や信念が何かの鋳型から生まれたものであれば、それは人の行動・考えを大きく束縛してしまうということにも留意する必要があります。荘子は儒家の標榜する「仁義」という考えは、人間の本性を失わしめる元凶だと厳しく批判しています。

臧（僕の意）と穀（婢の意）との二人が一緒に放牧された羊の番をしていて、二人とも（羊番の役目を忘れて）羊を逃がしてしまった。（そこに雇い主がやって来て）臧に向かって何に夢中になっていたのかと尋ねると、本（竹簡）を手にして読んでいたという。穀に何に夢中になっていたのかと尋ね

ると、双六をして遊んでいたという。この二人がしていた事は同じではないが、彼らが羊を逃がしたという過失は同罪である。清節をもって自ら任ずる伯夷は、義士という名声のために首陽山の麓で餓死（周朝の俸禄を固辞）し、大盗賊の盗跖（春秋時代・魯国で九千人の配下を従えた盗賊団の頭領）は物質的な利欲のために東陵山の上で命を失った。この二人は、死に至った原因は同じでないが、自己の生命をそこない、自然の本性を傷つけた点はひとしいのである。（伯夷も盗跖も羊を逃がした臧と穀であり）世間でいわれるように、伯夷は善人、盗跖は悪党と単純に割り切ってしまうわけにはゆかないのである。世の人々は一人残らず全てが外物のために自己の安らかな生を犠牲にしている。その犠牲が仁義のためであれば、世間ではその人を君子と呼んで尊重し、その犠牲が財貨のためであれば、世間ではその人を小人と呼んで軽蔑する。しかし、どちらも、自己の生を犠牲にしている点では同じなのに、片や君子と呼ばれ片や小人と呼ばれる。生き生きとした生を失い、人間の本性を損傷する点では、盗跖も伯夷も全く変わりがない。いまさら、君子だの小人だのいう区別をその中でしたところで始まらないのである。

■ ＝山木篇＝

●荘子山中に行きて、大木の枝葉盛茂するを見る（用と無用の間）

荘子行於山中、見大木枝葉盛茂。伐木者、止其旁而不取也。問其故、曰、「無所可用。」荘子曰、「此木、以不材得終其天年。」荘子出於山、舎故人之家。故人喜、命豎子殺雁而烹之。豎子請曰、「其一能鳴、其一不能鳴。請奚殺。」主人曰、「殺不能鳴者。」明日、弟子問於荘子曰、「昨日、山中之木、以不材得終其天年。今、主人之雁、以不材死。先生将何処。」荘子笑曰、「周将処夫材与不材間。材与不材之間、似之而非也。故未免乎累。

荘子山中に行き、大木の枝葉盛茂するを見る。木を伐る者、其の旁り止まりて取らざるなり。其の故を問ふに、曰く、「用ゐるべき所無し。」と。荘子曰く、「此の木、不材を以て其の天年を終ふるを得たり」と。荘子山より出でて、故人の家に舎る。故人喜びて、豎子に命じて雁を殺して之を烹しむ。豎子請いて曰く、「其の一は能く鳴き、其の一は鳴く能わず。請ふ奚れをか殺さん。」と。主人曰く、「鳴く能はざる者を殺せ。」と。明日、弟子荘子に問ひて曰く、「昨日、山中の木は不材を以て其の天年を終ふるを得たり。今、主人の雁は不材を以て死す。先生、将に何くに処らんとす」と。荘子笑ひて曰く、「周は将に夫の材と不材との間に処らんとす。材と不材との間は、之に似て非なるなり。故に未だ累を免れず。

※役に立たない「無用」であるがゆえに伐られることなく天寿を全うした大木と、一方、同じ「無用」の鳴かない雁は殺されてしまった。共に「無用」でありながら一方は生き延び、一方は殺された。この矛盾をどう捉えたらいいのですか、と門人は荘子に問います。荘子は、苦笑いしながら、有用と無用の真ん中に身をおくことだ、しかしそれは私の言う真の「道」ではないから、世間の煩いから抜け出すことはできないね、と答えます。

荘子（の一行）が山の中を通っているとき、大きなな木で枝葉が盛んに茂っているのを見た。樵がその木のそばに立っていたが、木を切らなかった。その理由を尋ねると、樵は「（曲がっていて瘤が一杯で）使い道がないのです。」と答えた。荘子は（門人たちに）「この大木は使い道がないということで、天寿を全うすることができたのだ。」と言った。荘子（の一行）は山を出ると、荘子の親友の家に泊まった。親友は喜んで子供の召使に命じ、雁をしめてご馳走させようとした。召使は（主人に）尋ねて言った、「一羽は鳴けますが、一羽は鳴けません。どちらを絞めましょうか。」と。すると主人は言った、「鳴けない方を絞めなさい。」と。翌日、門人が荘子に質問して言った、「昨日の山中の木は使い道がない（不材・無用）というお陰で天寿を全うすることができました。先程の主人の雁は役立たずということで殺されてしまいました。先生は、どちらの立場をお取りになりますか。」と。荘子は笑って答えた、「私はその使い道があるのと使い道がないのとの中間にいようか（役に立つとも立たぬとも判然としない中間の道を進もうか）。しかし、その中間というのは私の言う「道」に似てはいるが、真の道ではない。だからまだ世の累いから逃れることはできないのだ。（←それでは真の道とはどういうものか？引き続き荘子の論を追っていきます。）

若夫乗道徳而浮游者、則不然。無誉無訾、一竜一蛇、与時俱化、而無肯専為。一上一下、以和為量。浮游乎万物之祖、物物而不物於物、則胡可得而累邪。此神農黄帝之法則也。若夫万物之情、人倫之伝、則不然。合則離、成則毀、廉則挫、尊則議、有為則虧、賢則謀、不肖則欺。胡可得而必乎哉。悲夫。弟子志之。其唯道徳之郷乎。」

若し夫れ道徳に乗じて浮遊する者は、則ち然らず。誉も無く訾りも無く、一竜一蛇、時と倶に化して、肯へて専ら為すこと無し。一上一下、和を以て量と為す。万物の祖に浮遊し、物を物として物に物せざれば、則ち胡ぞ得て累はさるべけんや。此れ神農黄帝の法則なり。若し夫れ万物の情、人倫の伝は、則ち然らず。合へば則ち離され、成れば則ち毀たれ、簾なれば則ち挫かれ、尊なれば則ち議せられ、為す有れば則ち虧かれ、賢なれば則ち謀られ、不肖なれば則ち欺かる。胡ぞ得て必すべけんや。悲しいかな。弟子之を志せ。其れ唯だ道徳の郷か。」と。

※「用」と「無用」は二律背反する相対的概念で、人知の横溢する現実の世界の基準です。人はその基準に照らして日々暮らし、そこでは利に従って集合・離散や嫉妬、謀略、僻みなどが渦巻いています。そこでは安心なる

ものはない。大木と雁の話もこの世界の基準で判ずれば矛盾と映るが、殺された雁は我々の肉体に宿りその命を全うしているではないか。有用・無用の相対的価値観を超脱した無為自然の道を究めていきなさいと門人に諭しています。

真の「道」と「徳」とに身を乗せて世俗を超えた世界に遊ぶことができる人なら（そういう境涯にいる人なら）、そうではなくなる。その世界には（使い道の有る無し、有能・無能などという）名誉もなければ誉もないし、時には空飛ぶ龍、時には地を這う蛇となり、時勢とともに自在に変化して、強いて一つのことに拘って生きてゆくことはないのだ。時には超俗、時には世俗に往来し、和をもって自分の規範（量）とするのだ。万物の産みの親である「無為自然の道と徳」の世界に心を遊ばせ、万物を万物として、自分は万物の中でその万物の一つとして相対的に区別（比較対照）されることのない（絶対の）境地にいれば、どうして外物によって累わされることがあろうか。これが太古の帝王である神農や黄帝の法則としたものなのである。ところが、この世の万物の実情や、人間社会の倫理道徳として伝えられてきたものは、こうではない。付いては離れ、完成したかと思うと壊され、目立ったかと思うと挫かれ、身分が尊くなったかと思うと非難され、何かをしようかと思うと邪魔され、賢い人は謀略にかかり、愚かな人は騙される（なんと現実の世界は理不尽な世界であることか）。このような相対的二律背反の世界にいては、どうして絶対に安心だなどということができようか。なんと悲しいことではないか。弟子たちよ、このことをよく覚えておきなさい。（絶対の境地というものは）ただ、相対的価値観を超越した無為自然の道と徳との世界だけにあるのだ。」

●参考図書
・鎌田正監修　江連隆・若林力「漢文名作選1」昭和59年　大修館書店
・金谷治「荘子・内篇」2020年　岩波文庫
・諸橋轍次「荘子物語」1989年　講談社学術文庫
・福永光司「新訂中国古典選巻7／8　荘子・内篇／外篇」昭和41年　朝日新聞社